

機関番号：24403

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20402039

研究課題名 (和文) 日本型新宗教のアメリカ合衆国における受容
—グローバル化下の SGI の展開研究課題名 (英文) Americanization of A Japanese New Religion under globalization
—the Case of SGI-USA

研究代表者

秋庭 裕 (AKIBA YUTAKA)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：40222533

研究成果の概要 (和文)：本課題研究とそれ以前の計 6 年間にわたる科研調査によって、Soka Gakkai International (SGI) が、多民族社会であり、同時に圧倒的にキリスト教社会であるアメリカ合衆国において、どのように受容されたのかを明らかにした。調査研究は、SGI-USA の布教の歴史・会員の回心過程・日蓮仏教の翻訳のプロセスに焦点を合わせ、その結果、「2 段階のアメリカ化」という仮説を得た。

研究成果の概要 (英文)：Based on research conducted over the past six years, this research tried to resolve how Soka Gakkai International (SGI) has been accepted in the United States, a largely Christian society comprising people of many different racial and social backgrounds, focusing on the SGI-USA' s history of propagation, its members' conversion process, and the impact of the concepts of Nichiren among new believers, with reference to the American ethos.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2009年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
総計	6,300,000	1,890,000	8,190,000

研究分野：宗教社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：SGI-USA, 創価学会, 日本型新宗教, 日蓮仏教, 2 段階のアメリカ化, 綿密なインタビュー, 多民族社会

1. 研究開始当初の背景

(1) 今日、Soka Gakkai International (SGI) は、世界 192 カ国・地域に展開し、会員数 1,200 万人を越え、わが国の宗教としては例外的といってよいほどの規模で海外へ伝播している。しかしながら、SGI についての研究は、その規模に釣り合う量も質も欠いている。また、SGI の母体である、(日本の)

創価学会の研究も、歴史的な経緯もあって、やはり決して豊富とはいえない現状がある。

(2) このような現状をふまえ、本研究は、SGI と創価学会についての宗教社会的な研究の欠落を補おうとするものである。

創価学会は、わが国でも抜きん出た大教団であり、また、近年までは政権の一翼を担っ

た公明党といっかんして緊密な関係にあり、政治への関与も顕著なものがある。宗教一般、とくには「新興宗教」が嫌われるわが国の風土の中で、なぜ創価学会は大教団になり得たのか。

創価学会などの新宗教が急成長した戦後から高度経済成長期は、世俗化が進行した時期である。経済成長と世俗化の進行の関連は、ヨーロッパの国際比較の計量分析では多くの実証例がある。経済成長するほど、世俗化が進行する。つまり、宗教は衰退するのである。では、なぜ、日本・創価学会は、高度経済成長期において急成長したのであるのか。

これまでの日本の宗教社会学研究は、世俗化期に急成長をとげた、世界的見てもまれな創価学会の発展を十分に解明できていない。しかしながら、急成長の後、すでに30年以上停滞期にある現在の創価学会を研究するだけでは、往時の急成長の要因とメカニズムを捉えることはできないだろう。

(3) そこで本研究は、現在海外で活発に展開する、日本人・日系人の枠を越え現地への顕著な「適応」を示しているSGIに着目し調査を実施しようとするものである。SGIほどの規模で海外で受容された日本型新宗教は他には存在しない。その適応の要因を探ることで、グローバリゼーション下、キリスト教を基盤とする社会において、日本型新宗教の本質を理解するヒントを得ようとするものでもある。

アメリカ合衆国は、現代社会を特徴づけるグローバリゼーションの最先端の地の一つであり、グローバリゼーションのよって民族の多様化がいつそう促進され、新たな階層文化や社会倫理が生じ、異文化の混住が加速度的に増大している。本研究でも、これらの点に着目し、①エスニシティ、②階層文化、③社会倫理 ④異文化への適応状況などの観点からアメリカ合衆国におけるSGIの調査研究を行う。

(4) 高度経済成長期に急成長した創価学会についての研究は、鈴木広の「創価学会と都市的世界」、塩原勉の「創価学会イデオロギー」の2論文などごくわずかである。これらによって、社会の流動性やイデオロギーの面から創価学会の拡大要因が部分的には明らかにされたが、高度成長期を通じて、創価学会は研究者に門戸を開いていなかったため、それらに続く本格的な社会学研究は、行われなかった。

調査研究が困難であった国内に比べて、海外での布教についての研究は、いくつか行われた。井上順孝『海を渡った日本宗教』(1985)と、中牧弘允『日本宗教と日系宗教の研究』(1989)などを挙げるができるが、これ

らの研究は日系人以外への拡がりを十分には扱っていない。その理由は、時代的に、SGIが「現地化」する以前であったからである。近年の渡辺雅子『ブラジル日系宗教の展開』(2001)は、日系人以外への拡がりも扱っているが、救済観の現地化や現地人の価値観との葛藤などの観点からの分析があまり含まれていない、組織の側面からの研究が中心である。

(5) 西欧におけるSGI研究の進展としては、B.Wilson & K.Dobbelaere “A Time to Chant” (1994), P.Hammond & D.Machacek “Soka Gakkai in America” (1999)などが代表的である。

“A Time to Chant”は、SGI-UKをとりあげ、日蓮仏教に特有な「唱題」の社会的機能に着目し、それがイギリス社会の社会構造とどのように結びつくのかを論じている。会員は唱題のもたらす強い自己肯定性に導かれ、能動的な社会活動をおこなうことで、「脱物質主義」的な態度を形成する道筋を指摘している。

一方の“Soka Gakkai in America”は、会員が20万人を越えるといわれているアメリカ合衆国において、SGIをとりあげた。同書は、教えと社会構造の相互関連とその社会的な機能よりはむしろ、メンバーの社会的属性と布教のネットワークなどについて丹念な調査が実施されている。

これらの学術的背景を踏まえ、研究代表者と分担者は過去3年間に、ハワイ、ロサンゼルス、ニューヨークなどを調査し、基礎的なデータを収集し、現地のSGI職員と信者へのインタビューを行ってきた。その中で、以下の「2. 研究の目的」に挙げる4点を今後の研究課題として見いだした。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、上述の「背景」をふまえ、①エスニシティ、②階層分化、③異文化への適応の3つの観点から調査研究を実施する。

①エスニシティ。SGIは、当初日本人・日系人の信者が多く、彼らが多く居住するハワイからカリフォルニアに広まった。次にニューヨークを中心とする東海岸の都市部へ伸び、さらに中西部、南部へと拡大した。地理的な拡大にとどまらず、白人・アフリカ系・ヒスパニック系・アジア系などの多様なエスニックグループを包含している。エスニシティごとに宗教が異なることの多い合衆国において、それを縦断する布教が可能となったメカニズムとプロセスを明らかにする。

②階層文化。日本の創価学会は、階層的には下層の人々の間に広まった。また現在でも中心を担っているのは、中高年女性である。

一方、SGI-USAの会員は、若年または中年層で高学歴、専門職（志向）の人々が多いなどの特徴が指摘されている（Hammond & Machacek）。日本では創価学会の日蓮仏教の教えが、高度経済成長期の下層の人々の上昇移動への強い意欲を肯定したが、この教えが合衆国の中・上層の人々にどのように受容され、どのような社会的志向性を形成しているのかを調査分析する。

③異文化への適応。日本の創価学会は、一般に集団主義的であるととらえられている。日本文化に由来する宗教が合衆国に定着するとき、伝統や習慣の差異によって、さまざまな葛藤やコンフリクトを引き起こしてきた。SGI-USAにおいても、個人主義的なアメリカ合衆国において、日本的伝統の色濃い行動様式が葛藤を引き起こしたが、次第に日本で見られるのとは異なった組織の運営や儀礼が行われるようになった。この組織と組織文化の「アメリカ化」のプロセスは、幹部スタッフへの現地人の登用や法華経や日蓮の著作などの紹介と、その英語化に典型的に現れると考えられるので、このプロセスを詳細に調査する。

(2) 上記の項目の調査・分析を行うことで、①創価学会の社会学的研究に貢献でき、②日本人・日系人ではなく、現地の人に広まった日本型新宗教を研究し、③同時に、グローバリゼーション時代における宗教のエスニシティ・階層・社会倫理・異文化への適応のメカニズムと論理を明らかにすることを目的として、本研究を実施する。

3. 研究の方法

本研究は、これまでの予備的な調査の成果をふまえ、ロサンゼルスでのSGI-USA本部を中心に行う。調査は、主に以下に挙げる方法による。①教団とメンバーについての基礎データのいっそうの収集をおこい、全米における信者数と信者組織の変遷、また経典類の翻訳のプロセスを把握する。②典型的なメンバーと特徴あるメンバーについて、綿密なインタビュー調査を実施する。

①については、教団事務局に対してインタビューし、基礎データの収集と組織の発展拡大の過程を跡付ける。また、経典類の英語化過程の資料の収集と儀礼や集会の変化を調査することで、基礎的なデータを得るとともに、教えの「現地化」を把握する。

法華経や日蓮御書の経典類は、信者の教えの受容において、重要な機能を果たしているが、その用語や表現は逐語訳の段階を経て、「文化的な」翻訳に到ったといわれている。経典類も、儀礼や集会も本質的には日本もSGIも同質であると考えられるが、その形態

や運用は、翻訳における意識のように変化があったようである。その詳細を調査する。

②については、居住地とエスニシティに着目し被対象を選択し、綿密なインタビューを実施する。インタビューは、ロサンゼルス他に、以下の地域で実施する。

- ・日本人・日系人の多いハワイ
- ・多様なエスニシティと専門職や芸術家などのメンバーが多くみられる、グローバリゼーション的な特徴の濃いニューヨーク
- ・エスニックグループと階層・職業や居住地域、また宗教におけるセグレーションが比較的明瞭なシカゴなど中西部都市
- ・敬虔なカトリックが大部分である、近年人口増加の著しいヒスパニック系の多い南部地域としてのフロリダ

インタビューイーの選定は、多元的なアメリカ合衆国の特徴を反映するように努める。この意味で、いわゆるLGBT、つまりセクシャルマイノリティーの人々など、社会の伝統的な価値から距離のある人々も包含するように配慮する。

インタビューの分析は、秋庭裕・川端亮『霊能のリアリティへ』（2004年）において導入した、質的データ分析のための「計量テキスト分析」と、信仰者の生活世界の全体性を把握するための「物語論的ライフヒストリー分析」を用いておこなう。「計量テキスト分析」は、研究分担者・川端亮によって、テキストデータをパソコンでコーディングし、分析するものである。これによって、大量の質的データをコード化し計量的に扱うことが可能となる。

「物語論的ライフヒストリー分析」は、計量テキスト分析に基づいて、ライフヒストリーのテキストデータをグラフ化し、解釈する方法である。これによって、ライフヒストリーが鳥瞰することができ、話者の語る世界や人生に、私たちはある形象を与え一望することができる。そこでは、話者自身の意識しないレベルにおける、有意味な観念の連合をとり出すことができる。救済観のように高度に抽象的な宗教観念は、言葉で明示的に描き出される部分は限られているので、このような分析ツールの創意工夫することで分析のレベルを上げることができる。

4. 研究成果

(1) アメリカSGIの会員数は、11万人強であり、そのうち日本人比率は、20%ほどと推測される。このようにアメリカSGIは、日本人・日系人の枠を超えて現地に「適応」した数少ない新宗教の一つといえる。本調査の目的は、アメリカSGIの、言語、文化、社会状況が異なるアメリカでの適応を、いくつかの観点から明らかにすることである。

調査は、2005年から全米各地でインタビューを中心に、座談会や多くの人数が集まる集会での観察、拠点となった場所の訪問など実施した。

アメリカ SGI の歴史は、井上 [1985] と中野・粟津 [1997] を参考に、つぎの4つの時期に分けることができるだろう。

- I 1960年から60年代半ば・・・池田大作初渡米から日本人・日系人が中心の時代
- II 1960年代半ばから1970年代半ば・・・ストリート折伏によるアメリカ人の大量入会時期
- III 1977年頃から1990年代初め・・・Phase IIによる停滞期
- IV 1990年代以降・・・路線変更による転換期

ブラジルの PL 教団 [中牧 1986] やブラジルで SGI [渡辺 2001]、アメリカ SGI [井上 1985] などの先行研究によると、言語、儀礼、組織、教えの現地化、カウンター・カルチャーの流行などが SGI 受容の条件としてあげられている。ハモンド・マハチェク [2000] では、アメリカでの受容の条件として、1965年の制限的移民法の廃止、アメリカでの宗教的多元主義が、SGI の適応の面からは、英語での会合開催、アメリカのキリスト教会に倣った民主的組織運営、女性幹部の登用などによって、SGI は、アメリカ社会が求める超近代的な (トランス・モダン) 価値観に適合的であったことが述べられている。

本調査では、言語の現地化を主に取り上げ、日本宗教がアメリカに根づく要因を探求する際、言語の翻訳は重要だが、いくつかのレベルに分けて考える必要があるのではないかと仮説を得た。

それは、① 座談会などの会合のレベル、② 機関誌 (Seikyo Times, World Tribune など) のレベル、③ 池田大作の著作のレベル、④ 聖典 (御書や仏教用語辞典) のレベルである。会合のレベルでは、初期から英語が使われており、すでに 1970 年には、日本語ではなく英語が主として用いられていた。従来の研究では、座談会で英語を使うことや椅子に座ること、現地人の役職への登用がアメリカ化と考えられており、その意味では、遅くとも 1970 年代には SGI はアメリカ化していたといえる。

しかし、1970 年代後半からアメリカ SGI は Phase II とよばれる時期を迎え発展が停滞する。それは、このレベルの英語化だけでは不十分であり、70 年代後半からの停滞期が生じたのではないだろうか。

翻訳の過程を詳細に検討してみると、1960-70 年代は日本人が翻訳していたが、1980 年代よりネイティブが翻訳に大きく関わるようになり、仏教用語等も再考される。

これによって、日本語が透けて見える英語から自然な英語へと変化する。つまり、翻訳は 2 段階にわたって行われた。この過程を 2 段階の英語化と名づけた。これによって、翻訳レベルが向上し、会合、機関誌、池田の著作、聖典の複数レベルで、用いられる翻訳が適宜使い分けられ、4つの異なるレベルによって重層的な宗教的概念を伝えることができるようになったのである。

2 段階目の翻訳が 80 年代に行われ始めて以降、アメリカ人が深く教学を理解できるようになり、SGI の発展の基礎ができたのではないかと仮説を得た。

(2) 民族の壁を越えてアメリカ合衆国の人々が SGI に入信する理由は何か、また彼らにとって何が魅力なのかについて、回心論をもとに、アメリカ社会のエートスや社会状況とも関連させながら分析した。

ロフランドとスタークの回心過程論により、環境要因、個人的要因、入信にいたる経緯、その後の過程を分析した。

アメリカ SGI のメンバーに対するインタビューによると、入信前に持続的に極度の緊張を経験し、出来事に宗教的な意味をみとめ、問題解決への道を宗教的な観点からさぐり、宗教的意味づけにもとづく人生を歩む宗教的探求者となるという条件が当てはまった。入信したメンバーの多くが、入会前に、「貧、病、争」などの問題に直面している。入信時期との関連をみると、60 年代、70 年代、80 年代、90 年代以降の 4 つの時期で、貧病争、精神的な動機などのどれかが特に多いという目立った傾向性はなかった。貧病争をはじめ、幸福を求めるものが約 8 割を占めている。継続理由としては、メンバーの中で密度の濃い交流、感情的つながりが重要であった。人間関係が希薄化する現代社会にあって、あたたかな人間関係を求める心性とそれを提供する SGI の親和性がみられる。一方で、入会後に SGI 以外の人との関係が弱まることはあまりみられなかった。この要因としては、SGI が現世における生活と成功を重視していることが考えられる。

SGI が活動を展開していく 60 年代以降、アメリカ社会は様々なエートスの揺らぎを経験している。60 年代には、カウンター・カルチャー、リベラル派の動きがあり、70 年代には反動から保守派が盛り返し、80 年代後半以降は、Culture War とよばれるような文化・価値対立が生まれた (伝統主義 vs. 進歩主義、コミュニタリアン vs. リバタリアン)。さらには、アメリカン・ドリームをかかげる社会にあってその現実には、白人の選民思想があり、サラダ・ボール社会と称されるような人種による分断社会があった。

このような社会の変化にあって、「異体同

心」という宗教的概念により、脱民族的・脱階級的ベクトルを持つ新中間集団として、アメリカ SGI は、個人の道徳に対してリベラル（セクシャリティなど道徳的自由）に徹し、競争社会においては、徹底した個人の利益肯定主義で、キリスト教的罪の意識を払拭する宗教的世界観をメンバーに与えた。人のつながりを大切に、多様な価値と人々を包摂する意味でネオ・コミュニタリアンと呼べるようなこの集団は、アメリカ社会の中では、まさに対立して混じり合うことが難しい価値観や民族・人種が混じり合うことで魅力を生み出している。これを私たちは、「サラダ・ドレッシング理論」と名付けた。

多くのメンバーが、特定の目標をもって唱題をし、様々な功德をえていると語った。それは、競争社会、個人主義、上昇志向の文化にあって、SGI がもつ徹底した利益肯定主義に支えられている。功德、利益は、SGI の活動を通しての「人間革命」の証しであると肯定的に解釈し、キリスト教的罪の意識からの解放と、運命を自分で変えられるという思想により、ユダヤ・キリスト教的運命論からの解放を同時に与えた。さらには、未だに人種や性的な差別が強く、親密な人間関係を築きにくい社会にあって、脱民族的・脱階級的ベクトルを持つ新中間集団としての共同体も提供している。アメリカ社会に現存が難しいものを SGI が備えていることが、一定の割合でアメリカ人を惹きつけている。

(3) 1960年、第3代会長に就任直後、池田大作は「ハワイ・北米・南米」初訪問に出發する。この旅によって創価学会は海外布教を開始した。池田の師である第2代会長・戸田城聖の「東洋広布」の遺訓をうけ、まずアメリカ合衆国にその第一歩を踏み出した。

アメリカ SGI は、1960年から60年代半ば、ハワイやロサンゼルスを中心とする西海岸において、当初、日本人と日系人の間に定着した。当時中心となって教線をになった「戦争花嫁」と日系人の活躍が特筆に値する。この時代、海を渡った女性たちによって、日蓮仏教は、最初家庭において、国境・民族・宗教を越えたことが重要である。

60年代半ばから70年代半ばにかけて、アメリカ合衆国は若者たちの「反乱」の季節を迎える。ベトナム戦争反対、公民権運動、カウンター・カルチャーの嵐、学生運動の高揚などが全米を覆った。このような社会状況の中で、「広宣流布」は、その歩みをさらに本格化させた。「反乱」の中心地の一つであった西海岸で、日蓮仏法はアメリカの若者世代と出会う。それは、戦争花嫁や日本人（移民）とアメリカ人の若者たちとの、直接的な出会いを意味した。異文化同士の邂逅である。この時代、個人主義的で、多文化・多民族状況

を常態とする社会において、生まれや出自をまったく異にする日蓮仏法という、日本型新宗教の本格的な布教が始まったのである。

70年代半ば以降、アメリカ SGI は、Phase II とよばれる時期を迎える。Phase II とは、偶然にもたらされた停滞や後退と理解すべきでないだろう。Phase II は、アメリカ SGI の初代理事長であった G. ウィリアムス（貞永昌靖）時代の達成の功績とともに、その限界を示しているのではないだろうか。ウィリアムス時代の布教は、過度に「日本的」であったと表現できるかもしれない。たしかに経典や書籍などの翻訳は、布教開始以来一貫してさまざまな媒体で積極的に進められていた。しかし、会合やコンベンションに見られる団体行動志向的な様式（ユニフォームの着用・一糸乱れぬ集団行動など）や、壮年部・婦人部・男子部・女子部などの年齢階梯的でジェンダー別の組織原理などは、アメリカ合衆国の人びとのエートスとは懸隔が非常に大きかった。

それが、Phase II という「民主化」要求となって噴出したと解することができるのではないだろうか。当時のアメリカの会員たちは、信仰行動の一つ一つを取り上げて、「それは仏法なのか。それとも、たんなる日本の伝統なのか」を distinguish することを要求したという。「私たちの欲しいのは日蓮仏法であって、日本人の伝統ではない」という表現もしばしば用いられたという。

このように振り返ると、Phase II とは、個人主義と民主主義をベースとする社会において、日蓮仏法が根付くために必要であったプロセスであり、組織・行為レベルにおける「第2段階目の翻訳」に比定することができるかもしれない。

では、さまざまな困難な課題に遭遇しながらも、なぜ SGI はアメリカ合衆国に定着できたのかということについて、日蓮思想のインパクトという点から考えよう。日本宗教の特徴である現世肯定的救済観という点から考えて、おそらく日蓮仏法はきわめてストレートな教義をもっている。つまり「煩惱即菩提」「生死即涅槃」という「一生成仏」の思想である。おそらく、この思想こそ、ユダヤ＝キリスト教的 worldview に立脚する社会に生きる人びとに、大きな魅力を与えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

①川端亮、秋庭裕、稲場圭信、SGI-USAにおけるアメリカ化の進展—多民族社会における会員のインタビューから—、宗教と社会、

16 卷、査読有、2010、89—125 頁

②川端亮、新宗教における二段階の英語化—SGI-USAの事例から—、大阪大学大学院人間科学研究科紀要、36 卷、査読無、2010、39—57 頁

③稲場圭信、ハワイの宗教受容、宗教と現代がわかる本 2010、査読無、2010、142—145 頁

〔学会発表〕(計 12 件)

①Akira Kawabata, “Americanization and Post-Americanization of a Japanese New Religion: The Case of SGI-USA (1)SGI-USA Past and Present: The Adaptation Process”, 20th World Congress of the International Association for History of Religion, 2010/8/17, Tronto

②Yutaka Akiba, “Americanization and Post-Americanization of a Japanese New Religion: The Case of SGI-USA (2)Phase II as the Democratization of SGI”, 20th World Congress of the International Association for History of Religion, 2010/8/17, Tronto

③Keishin Inaba, “Americanization and Post-Americanization of a Japanese New Religion: The Case of SGI-USA (3)Conversion Process of SGI-USA members: The Ethos and Soka Spirit in American Society”, 20th World Congress of the International Association for History of Religion, 2010/8/17, Tronto

④川端亮、アメリカSGIの歴史と現在—適応のプロセス—、「宗教と社会」学会第 17 回学術大会、2009 年 6 月 7 日、創価大学

⑤稲場圭信、信者の回心過程—アメリカ社会のエートスと soka spirit—、「宗教と社会」学会第 17 回学術大会、2009 年 6 月 7 日、創価大学

⑥秋庭裕、日蓮の 21 世紀—グローバル化—、「宗教と社会」学会第 17 回学術大会、2009 年 6 月 7 日、創価大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋庭 裕 (AKIBA YUTAKA)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：4 0 2 2 2 5 3 3

(2) 研究分担者

川端 亮 (KAWABATA AKIRA)
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：0 0 2 1 4 6 7 7
稲場 圭信 (INABA KEISHIN)
大阪大学・人間科学研究科・准教授
研究者番号：3 0 3 6 2 7 5 0